＜書評論文＞

感情・家庭・資本主義

―― 感情の社会学と家族 ――

Arlie Russel Hochschild,
The Commercialization of Intimate Life: Notes from Home and Work.
(University of California Press, 2003)

菅　原　祥

1．はじめに

著者アーリー・ホックシールドは、わが国では『管理される心』の著者であり、ゴフマンの分析枠組みを用いながら感情を社会学的に分析した「感情の社会学」の第一人者として名高い。だが彼女はそれ以上に、感情と心という独自の視点から現代アメリカ社会の女性にとっての家族・ケア・労働の問題を見つめ続けている研究者である。最初の主著『管理される心』(1983) 以降の2つの主著、『セカンド・シフト』(1989) と*The Time Bind* (1997) では、こうした家族・夫婦生活における感情の軋轢の問題、そして仕事と家庭のあいだの摩擦といった問題が論じられている。彼女の研究の最大の魅力は、実際の生活者たちの生きられた現実に常に寄り添いつつも、あくまで分析的な視点を失わないことである。こうした点が、彼女の仕事にある種の強度を与えている。

本書は、そんな著者ホックシールドの70年以降の論文・エッセイから17本を集めたものであり、彼女のこれまでの思考の軌跡が一望できる。70年台の「感情の社会学」から、徐々にテーマの重点を家族と女性、共働き、そしてケアなどへと移していく中でも、彼女の思考の中核はある一貫した態度・関心に貫かれている。このような観点から、彼女のこの著作を紹介しつつ、同時に彼女のこれまで辿ってきた道筋をあらためて見直すことは、意味のあることだろう。

ホックシールドの視線の中心には常に、かわりゆく現代社会における女性の労働市場への参入と、それに伴う男女間・家族の感情の摩擦が据えられている。20世紀後半のアメリカにおいては女性の就業率は急激に上昇した。だがこうした女性をとりまく社会・経済的変化にもかかわらず、男性の側はなかなか自らの行動様式・イデオロギーを変えようとはせず、W.F.オグバーンの言う一種の「文化遅滞」の様相を呈している。こうしたことがらと平行して起こっているのが、離婚率の上昇、少子化、そして非婚者の割合の増加である。仕事と家事の板ばさみに苦しむことを恐れる人々は、しばしば「子供を生まない」「結婚しない」という選択に進むのである。結果、多くの論者が述べるように、現代社会における愛とパートナーシップは、流動性を増して「液状化」し（Bauman 2000）、ますます「その場かぎりのもの」（Giddens 1992）となり、山田昌弘（2004）の言葉を借りれば「家族の個人化」の状況が起こっている。

こうして流動化や個人化の度合いを強めた現代の家族において最も問題となっているのが、「ケアの真空化」という事態であろう。働く母親たちがますます家事・育児を行う時間的・精神的余裕を失っていく一方、容赦ない資本主義原理がどんどん家庭内領域に侵入し、この穴を埋めつつある。このような状況の中でホックシールドが常に問うのは次のようなことである。女性の社会進出を進めながらも、なおかつ家庭における人間的なケアを失わないためには、われわれはどうすればいいのか。仕事とケアは両立できるか。そしてそのためには、現在の資本主義社会における職業システムを含めた、より大きな改革が必要なのではないか。だが、こうした問いに対する彼女の答えを見る前に、われわれはまず彼女の思考の原点にある「感情」の問題に立ち返ってみよう。

2．感情の社会学

ホックシールドは彼女の社会学的研究方法の出発点として、「感情」を据える。
自己、あるいは感情というものに対する彼女以前の見方として、彼女はゴフマンに代表されるような意識的・理性的自己の概念と、フロイトに代表されるような無意識的・情動的自己の概念とを対比させ、そのどちらをも、「意識的な感情」の次元を捉え損なっているとして批判している。どちらのアプローチも、自らの感情を「意識して」作り出し、管理するという主体の行いをとらえ切れていないのである。人々は、単に外見だけの印象操作に腐心しているだけではない。また、無意識の感情に突き動かされるだけの存在でもない。彼らは、実際になにかを「感じよう」と努力しているのである。このような主体の行いを、ホックシールドは「感情ワーク」と呼ぶ。

人々の感情は、当然ながらその場のコンテキストに深く依存している。このような感情のコンテキストにおいて、とりわけホックシールドが関心を向けるのが、感情の「規範的次元」に関わる問題である。規範的次元とは、かくかくしかじかの状況でわれわれはどう感じるべきか、どう感じるのが適切か、ということがらに関わるものであり、感情と「感情ルール」の関係に関わるものである。われわれが一体どんな感情ルールを持っているかは、たとえばわれわれが「僕には怒る権利がある」とか、あるいは、「君はそんなに罪悪感を感じる必要はない」などというような言葉を発するときに知られる。当然ながら、実際に感じることと感じるべきこと、そして感じたいと思うこととの間には一種のずれや不一致が伴う。われわれはこうした不一致の間をたえず揺れ動きながら生きているのである。

ある人の有する感情ルールはその人のイデオロギー的スタンスと深く関わっている。それゆえ、ある人が自分のイデオロギーを変えた場合、その人は状況に対応するために、古いルールを捨てて新しいルールを取り入れる、ということがしばしば起こるだろう。ここにきてわれわれは、冒頭に挙げた現代の私的領域における問題をよりよく分析することができる。当然のことながら、男女間のフレーミング・ルール、感情ルールは伝統的に異なったものであった。男女間に絶対的・本質的な差異が想定されていた価値観においては、男性が稼ぎ手として賃労働をし、女性が家内再生産領域を受け持つというのは、当たり前のこととして受け止められていた。この状況を徐々に変えていったのがフェミニズム運動である。フェミニズムのイデオロギーは、男女共に仕事と家庭を等しく優先すべきであると主張した。そしてこのことは単に状況のフレーミングのみならず、感情という領域においても重要な含意を持つ。今や女性は、夫から仕事をしていることを咎められても、それに対して怒る「権利」を持っているのである。こうしたイデオロギーの変化と感情ルールの変化、そしてそれに伴う男女間・夫婦間の感情ルールのギャップこそが、現代の夫婦生活における軋轢の根底にある。このことを次節で詳しく検討しよう。

3．誰が家事をするのか：共働き世帯と家事

ホックシールドは89年の著書『セカンド・シフト』で、家庭内領域における家事・育児・ケアの分担の問題を取り扱っている。この研究の核になっているのは、約50組の共働き夫婦への詳細なインタビュー調査であり、本書収録のいくつかのエッセイ（第7章、第9章、第11章）もこの調査を土台としたものである。

「セカンド・シフト」とは、「第二の勤務」、すなわち、外で働く女性たちが家に帰って

きてからさらにまた従事しなければならない家庭内労働のことを指している。先にも述べたように、外で働く母親、しかもフルタイムの勤務に就いている母親の割合は急激に増加した。にもかかわらず、父親が家事や育児に参加する割合は母親と比べて圧倒的に少ない。ある数字によれば、妻たちはその夫たちと比べて年間1か月分も余分に働いている計算になるという。他方その夫たちの方はといえば、妻たちが享受すべくも無い「余暇」の時間を楽しんでいる。

このような状況の中、共働き夫婦の間では、誰が、何を、どのくらい行うべきかといった問題が、夫婦間の闘争の焦点となる。ある世帯では、夫はほぼ平等に妻と家事を分け合っている。ホックシールドが調査した共働き世帯のなかでは、こうした男性は全体の約20パーセントであった。また、約70パーセントの男性は平等に分担はしておらず、「ある程度」の家事をやっていた。残り10パーセントが全く家事を手伝わない男性である。

このような家事の分担に対する態度の違いは、いったいどこから来るものなのだろうか？ここでこうした違いをもたらすものとしてホックシールドが想定するのが、夫婦おのおのが有するジェンダー・イデオロギーである。このようなイデオロギーこそが、「男であること」「女であること」とはどのようなことか、そして、男性あるいは女性が、家庭の外あるいは家庭内でどのような仕事をどの程度すべきかということに対する、おのおのの感じ方を決定しているのである。

ホックシールドはこのようなジェンダー・イデオロギーの類型として、「男は外、女は内」のような「伝統型」、男女が共に仕事も家事も平等に行うべしという「平等型」、そして「移行型」の3類型を呈示している。「移行型」は両者の中間形態であり、前者二つの立場のイデオロギーの中間に位置するさまざまなバリエーションを反映している。

さて、当然のことながら、多くの夫婦において夫と妻の「ジェンダー・イデオロギー」は程度の差こそあれ異なっている。この夫婦間の温度差がしばしば「誰がどの程度家事をするのか」といった問題に関して不一致を起こさせ、夫婦間の軋轢を生むのである。多くの場合それは、現代の社会情勢につれてより速く変化した女性たちの「新しい」イデオロギーと、変化が遅れた男性たちの「古い」イデオロギーの対立といった形を取る。

第7章 'The Economy of Gratitude' では、ホックシールドは夫婦間の「贈り物」と「感謝」について考察することで、この点を分析している。同じジェンダー・イデオロギーを共有する夫婦においては、何が「贈り物」で何が「感謝されるべきもの」であるかに関する受け手と贈り手の定義は、互いに一致している。そこでは、贈り物が不発になることは無いのである。ところが、この定義に関して両者の間に不一致があると、贈り物は贈り手の意図したとおりには受け取られず、逆に不和の原因ともなる。

ホックシールドが調査したある夫婦を例に挙げよう。この夫婦においては、夫は、本屋の経営という収入の不安定な仕事に打ち込んでいる。他方妻のほうは有能なキャリアウーマンであり、夫の約3倍もの収入を稼いでいる。妻にとっては、この収入が自分から夫への大きな贈り物である。なぜなら、妻の収入のおかげで、夫は家計を気にせずに自分の好きな仕事に打ち込むことができるからだ。しかし、夫のほうではこうした妻の「贈り物」に対して全く違った見方をしている。彼は素直にそれを受け取れない。なぜなら、その「贈り物」は本来彼が妻に対して贈るべきものであるからだ。

他方、家事の大部分をこなしているのは妻のほうである。彼女はそのことについて夫に強く言うことができない。なぜなら、妻のほうが多く稼いでいるからという理由で夫により多くの家事を求めてしまうと、彼女の「贈り物」はもはや贈り物でなくなってしまうからだ。このように明らかに不均等な状態であるにもかかわらず、夫に言わせると、彼の妻はラッキーなのである。なぜなら、彼のように妻の仕事に理解のある男性は現代においても大変まれであり、このまれさが彼の存在を妻にとって貴重なものとしているのである。

皮肉なことに、ホックシールドのインタビューした人々の中では、男性と比べて圧倒的に多くの女性が「自分は幸せだ」と答えている。男性たちより女性たちのほうが圧倒的に多くの負担を強いられているにも関わらず、である。こうしたことからも容易に読みとれるように、男女間の感情生活はより広い社会・文化的文脈における不平等な権力作用に徹頭徹尾貫かれたものとして捉えられなければならない。権力はまさに感情を通して働いているのである。

4．家族・仕事・資本主義：時間をめぐるジレンマ

このように、女性の就業率が上昇する一方で、「働く母親」たちは依然として家庭内の雑用の大半をこなすことを当然のように要求される文化状況下にある。こうした中、現代の家庭生活に現れる顕著な特徴は「能率化」および「商品化」であろう。家庭を神聖視し最優先するという、現代の神話的「理想」とは裏腹に、仕事に追われ時間のない母親にとって、現実の家庭生活はますますせきたてるべきもの、急いでするべきものとなっている。反面、そのような時間の不足を穴埋め、それに取って代わり、母親たちを助けてくれるのが、「商品」である。インスタントのオートミールは彼女から朝食の準備の手間を省いてくれる。それだけではない。自分が仕事で居ない間子供の面倒を見てくれるベビーシッターを雇うことで、彼女は「ケア」そのものさえも買うことが可能なのだ。

ホックシールドは90年代にアメリカのある大企業「アメルコ」（仮名）の従業員に詳細

なインタビュー調査を行い、その調査をもとに*The Time Bind*を著した。この調査に関連するエッセイ・論文は、本書の中にもいくつか収録されている（第10章、第13章、および第15章など）。これらエッセイの中でホックシールドが問うのは、このような家庭と仕事、および資本主義の関係である。

さて、ホックシールドが問うのは次のようなことだ。こうした仕事・家庭におけるスピードアップの弊害を解決し、家庭と仕事をうまく両立させるために、アメリカの多くの大企業ではfamily-friendly policyと呼ばれる、フレックスタイム制やワークシェアリング、有給育児休暇などの施策を提供している。しかし、実際のところ、こうした施策を利用して仕事の負担を減らそうとする労働者はほとんど見当たらないのである。なぜなのだろう？

いくつかの理由として、労働時間が減ることで給料も減ってしまうということや、現場における施策の浸透の不徹底などが考えられる。競争原理がますます激化する現代の資本主義経済においては、こうした施策は絵に描いた餅でしかなく、多くの労働者が便利に利用するにはまだまだほど遠いものなのである。だがそれ以上に決定的だったのは、ホックシールドがその詳細なインタビュー調査から見出した、より全般的な文化的変化であった。

まずホックシールドが見出すのは、「家庭の仕事化」と平行して進む「仕事の家庭化」である。コミュニティがその結びつきを失い、家族がますます孤立化する中で、そうした家族に必要なサポート構造を穴埋めする形で、職場のサポート組織がますます力を得るようになってきたのである。託児所のみならず、職場内に設けられたジム、独身者クラブ、肺がんサポートグループ、聖書勉強会など――つまりは、「市民生活」そのものが、職場という領域にまるごと存在していたのである。

何よりホックシールドを驚かせたのが、家族と職場に対する従業員たち自身の態度である。フィールドに入る前、ホックシールドは次のような前提を当然のように立てていた。すなわち、家庭とは従業員たちにとって最もリラックスでき安心できる空間であり、自分たちが「ほんとうのじぶん」であると感じられる場所であろうと。他方、仕事はといえば、とりわけ低賃金の工場労働者にとっては、不安と苦痛に満ちた場所だろう。そこでは彼らはリラックスもできず、つねに解雇の不安に晒され、自分をただしく評価してもらえることも少ないだろう。だから従業員たちは、より仕事の時間を減らし、その分家庭に割く時間を増やすことを望んであるはずだ、と。

真相は全く逆であった。ますます急がされ、急かされる事を余儀なくされる現代の「仕事化された」家庭生活においては、多くの従業員が、家庭生活を苦痛と感じ、仕事に行く

ことでそこから「逃れられる」と感じていたのである。それだけではない。これだけ離婚率が高い現代の状況においては、20年以上も同じ会社に勤め続ける一方で、もう既に2回も3回も離婚を経験しているという人も多くいる。そうした人たちにとって、家庭ではなく仕事こそが、彼らが拠って立つことのできる強固な足場であり、安心の源なのである。また、彼らは家庭よりも職場におけるほうが圧倒的に「自分が評価されている」と感じることができる。彼らにとっては職場の自分こそが「ほんとうのじぶん」なのである。

こうした全般的な文化的変化こそが、多くの従業員が仕事と家庭のスピードアップに抵抗せず、むしろそれを受け入れている理由の一端になっているのではないか、とホックシールドは推測する。そこにホックシールドが見出したのは、家族という領域の弱体化と資本主義原理による侵食に他ならない。

女性の社会進出とそれに伴うケアの真空状態。こうしたことがらに対してわれわれはどう対処するのか。ホックシールドが強力に推進しようとするモデルが、彼女の言う「暖かいモダン」なモデルである。「クール・モダン」なモデルが公的な制度や組織にケアを全て任せることで家庭生活を資本主義的に「合理化」し、スピードアップするのに対し、「暖かいモダン」モデルのほうは、外部の制度にある程度の寄与をさせつつも、男性にも女性と等しくケアに関与してもらう。具体的には、男性の家庭内領域活動への参与、職場での勤務スケジュール構造の変革、そして、ケアや家事などの「女性の仕事」およびデイケアサービスなどの公的ケアサービス業に対する社会的により高い評価、などである。彼女の分析からも垣間見えるように、こうしたことがらを全て現実に達成するというのはほとんど不可能にも近い理想ではある。だが、そうした理想に向かって一歩一歩進んでいくことこそ大事なのだ、と彼女は力説している。

5．むすびにかえて

ホックシールドは、現代の急激な社会的変化とそれに伴う私的領域の弱体化、およびケアの真空化を真正面から受け止めつつ、それでもなおかつ「家庭」という理念、「家庭」に存在すると想定される「かけがえのない温かさ」の価値を守り高めていくにはどうするべきかという方向性で、ひとつの道を指し示している。そういうものとして彼女の議論は納得のいくものだ。ただわたしが彼女の議論を読んで物足りないところを感じるとすれば、それは彼女の提言が（彼女自身も認めるように）いささか「ユートピア的」過ぎるきらいがある、という点であろうか。

本論中でも紹介したとおり、彼女は第7章において、O.ヘンリーの有名な短編「賢者の贈り物」のメタファーを用いて、夫婦間における感謝の「贈り物」の可能性について思いをめぐらせている。確かに美しい比喩だ。だが、このある種誇張された「美しさ」の中に、わたしはかすかなあやうさを感じる。わたしには彼女が、私的領域の「かけがえのなさ」というものの未来に、彼女が批判するトラディショナリストと同様の過大な期待を寄せているように思えてならないのである。

もちろん、こうした意見は単なるシニシズムに過ぎないのかもしれない。最初に述べたとおり彼女の作品の最大の魅力は、あくまで日常的な生活者に寄り添った、その視点の鋭さである。彼女の分析は、いわば誰もが日々体験していながら、あえて気にせずやりすごしている「日常の舞台裏」をみごとに開陳してくれるという点において、まさに社会学の醍醐味ともいえる面白さを具えている。現実の家庭と仕事をとりまく諸問題に日々対応していかなければいけない現代社会において、彼女が行ったような詳細なフィールドワークを通じた精緻な現実分析は、これからますますその真価が発揮されてゆくだろう。

参考文献

Bauman, Z. 2000, *Liquid Modernity.* （＝2001、森田典正訳『リキッド・モダニティ』大月書店.）
Giddens, A. 1992, *The Transformation of Intimacy.* （＝1995、松尾精文、松川昭子訳『親密性の変容』而立書房.）
Hochschild, A. L. 1983, *The Managed Heart.* （=2000、石川准、室伏亜希訳『管理される心』世界思想社.）
————、1989, *The Second Shift.* （＝1990、田中和子訳『セカンド・シフト』朝日新聞社.）
————、2001(1997), *The Time Bind* (2 nd ed.), New York: Holt.
山田昌弘、2004、「家族の個人化」社会学評論54(4).

（すがわら　しょう・修士課程）